

## 楽曲紹介

解説=小畑恒夫

ヴェルディ  
歌劇『ファルスタッフ』

## ■作品の成立背景と特色

ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)はキャリアの最初期に『一日だけの王様』(1840)で失敗して以来、容易に喜劇オペラに手を染めようとしなかった。ヴェルディの資質が喜劇向きではなかったのかもしれないが、社会が急激に変化して喜劇そのものが時代遅れになったこともあるだろう。実際ドニゼッティの『愛の妙薬』(1832)や『ドン・パスクアーレ』(1843)を最後に、喜劇オペラは成功していない。

デビューからおよそ半世紀。73歳のヴェルディは『オテッロ』(1887)によってイタリア・オペラの頂点を極め、そこでキャリアを終えようとした。しかしそんな巨匠に喜劇オペラを書くよう強く勧めたのは『オテッロ』の台本を書いたアッリーゴ・ボーイトだった。作曲家でもあるボーイトは、イタリアーの高度な作曲技法を身に付け、人生経験を十分に積んだヴェルディなら、きっと新時代にふさわしいユニークな喜劇オペラが創造できると確信したのである。

ヴェルディの気質を知り尽くしたボーイトは、シェイクスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』を骨子にした喜劇オペラの筋書きを作った。それを見せられたヴェルディは大いに喜び、再び2人で協力することに同意した。2人が創造した『ファルスタッフ』は伝統的な喜劇とは全く違う。もちろん番号オペラではなく、独立したアリアを取り出すこともできない。こうした様式上の特徴はほとんどボーイトの台本によるので、『ファルスタッフ』のかたちはボーイトが作ったと言える。しかし、そのかたちに生命を吹き込んだのはヴェルディだった。

『ファルスタッフ』の笑いは典型的ではない。人生を深く知った「賢者」によって、人間たちの営みがほほ笑みをもって描かれている。モーツァルトやロッシーニなど過去の音楽をパロディ風に引用して楽しみながら、老いた巨匠は柔らかな精神でこの奇跡のような人間喜劇を書き上げた。オペラの完成は1892年。翌年2月9日にスカラ座で初演され、センセーショナルな成功を収めた。

10/20

10/21

10/23

## ■筋書きと聞きどころ

### 〔第1幕〕

#### 第1部 居酒屋ガーター亭の内部

ヘンリー四世統治下のイギリス。老騎士ファルスタッフはハル王子の遊び友だちとしてさんざん悪事を働いた無頼漢で、王子が戴冠して御役御免になった今は2人の従者を連れてウィンザーのガーター亭に住み着き、勝手気ままに暮している。大酒を飲んで酔っぱらう悪癖は抜けず、飲み代がなくなれば踏み倒すことも。

序曲も前奏曲もなく、いきなり幕が開くとファルスタッフは2通の手紙を書きあげたところ。医師カイウスが、酔って暴れたファルスタッフに損害を受けたと怒鳴り込んでくる。ファルスタッフはそれを認め、黙っているのが身のためだと脅す。さらに従者たちが金を盗んだとヒステリックに叫ぶカイウスを、証拠はないと結論づけて追い返す。その後で従者のバルドルフォとピストーラに「盗みは首尾よくやれ」と訓戒を垂れる。ドラマは短い言葉が飛び交う会話で進行。雰囲気や感情を活写するオーケストラに断片的な朗唱が絡み合う。

亭主が食事の勘定書きをもってくる。ファルスタッフは財布がほぼ空なのに気づいて腹を立て、「お前らの飲み代がかかりすぎる」とバルドルフォを叱りつける。

ファルスタッフは従者たちに、ウィンザーの富裕商人の妻、アリーチェとメグを愛人にして金を巻き上げる計画を明かす。自分がどれほど色男であるかを、彼は女の口調を裏声で真似ながら得意げに語る。喜ぶ従者たちに恋文を届けさせようとすると、彼らは「使い走りは名誉にかかわる」と断る。いつも俺にへつらうお前らにどんな名誉があるのだ、とファルスタッフは怒鳴りつけ、長いモノローグ（一人で歌う部分）でユニークな名誉論を展開する。ファルスタッフは最後に箒を手にもち、2人の従者を叩き出してしまう。

#### 第2部 フォード邸のそばの庭園

アリーチェ、ナンネッタ、メグ、クイックリー夫人が朝の挨拶をかわし、すぐにメグとアリーチェが同じ文面の恋文を受け取ったことがわかる。2人は古風な文面にふさわしいロマンティックな歌謡調で手紙を読み合わせる。女たちは思い上がった老騎士ファルスタッフをおびき出して、皆で懲らしめることにする。4人の女たちが16個の8分音符で大笑いする効果が凄まじい。

一方ファルスタッフに叩き出されたバルドルフォとピストーラは富裕商人フォードに近づき、「お宅の奥さんが狙われている」と注進する。フォードはもちろん、一緒にいたカイウスとフェントンも驚く。フォードは変装して無頼の騎士ファルスタッフに会うことにする。女たちも男たちも、それぞれファルスタッフを懲らしめようと相談するが、若いナンネッタとフェントンだけは自分たちの恋に夢中。恋人たちの二重唱は喧騒をしばし忘れさせる清涼剤のようだ。女たちの四重唱と男たちの五重唱は交互に現れるが、途中で2つのグループが交錯する場所があり、そこでは6/8拍子と2/2拍子が同時に進行する斬新な技法（ポリリズム）が見られる。

女たちはクイックリー夫人をファルスタッフへの使者に選び、陽気に解散する。

## 〔第2幕〕

### 第1部 ガーター亭の内部

バルドルフォとピストーラは反省したふりをしてファルスタッフのもとへ戻る。そこへクイックリー夫人が「ごめんくださいませ Reverenza」と時代がかったお辞儀をしながら登場。彼を「女殺しの色男」と持ち上げ、「アリーチェは旦那が家を空ける2時から3時にあなたを待っている」と伝える。「2時から3時まで Dalle due alle tre」の印象的な音型はくり返されて耳に残るし、「可哀想な女 Povera donna」は『椿姫』のパロディだろう。クイックリーが去るとファルスタッフは上機嫌で「行け、年老いたジョン」と小唄を歌う。

次にフォードが商人フォンターナと名前を偽って訪ねてくる。フォードはアリーチェに片思いする男になりすまし、贈り物をしてもマドリガルを歌っても効果がないので、あなたが試しに彼女を誘惑してくれないだろうか、と軍資金を渡して頼み込む。ファルスタッフは喜んで金をとり、お安い御用、すでに2時から3時の間に逢い引きの約束ができていたと言い、着替えのために引込む。妻の浮気を知って愕然としたフォードは、これは「夢か、それとも現実か」と独白。やがて胸に怒りがわきあがり、復讐を誓う。喜劇のなかに突然「復讐のアリア」が出現する。ファルスタッフが着飾って戻ると音楽はまた喜劇に戻り、2人は連れ立ってガーター亭を出る。

## 第2部 フォード邸の一室

クイックリーの報告を聞いて、女たちは大騒ぎで茶番劇の準備を始める。父親から医師カイウスとの結婚を命じられたナンネッタは元気がないが、母親たちからそんなことはさせないと言われて機嫌を直す。

10/20  
10/21  
10/23  
ファルスタッフが現れ、ひとりリユートをつま弾くアリーチェに言い寄る。このやや古風な歌は、色男を気取る勘違い男ファルスタッフにふさわしい。「ノーフォーク公爵の小姓だった頃は私もほっそりしていた」と語るころは、太った体と軽やかな音楽のミスマッチが笑いを誘う。クイックリーとメグが「ご主人が来る」など嘘を言ってファルスタッフを怖がらせるが、本当にフォードが戻ってくるので、女たちもあわてる。

間男を捕まえるのだとフォードが男たちを引き連れて乱入してくる。ファルスタッフは隙をみて洗濯カゴに隠れる。家捜しの大混乱、洗濯カゴのふたを押さえる女たち、フェントンとナンネッタの恋歌など、雑多なものを精妙に同時進行させながら、音楽はまるで絵巻物のような九重唱へ発展する。衝立の後ろに間男の気配が！ 男たちが衝立を倒すと、そこにいたのは若い恋人たち。男たちがよそを探しに行くと、アリーチェは使用人に命令し、ファルスタッフを洗濯カゴごとテムズ川へ捨てさせる。

### 〔第3幕〕

#### 第1部 ガーター亭の横の広場

テムズ川でずぶ濡れになったファルスタッフは夕陽に身をさらし、温かいワインを飲んでようやく人心地がつく。「ひどい世の中だ」で始まる長い独白は、人生の黄昏を迎えた作曲家自身の心境と重なるかもしれない。断片的な言葉とオーケストラが移ろう気分の変化(憂鬱から陽気まで)を表現する。クイックリー夫人が現れ、あれは手違いだったと釈明する。はじめは疫病神を追い払うようにするファルスタッフだが、アリーチェの手紙を渡され、「夜の狩人」に変装して真夜の公園で会うことを承諾してしまう。彼がまたワナに落ちたことを、物陰から見ていたアリーチェやフォードたちも確認する。夜中にはみんなで仮装して公園の森に出かけ、ファルスタッフを懲らしめるつもりなのだ。一方フォードはカイウスに、今夜娘と結婚させるから修道僧に仮装して来るようにと言うが、それをクイックリーに聞かれてしまう。

## 第2部 ウィンザーの公園

夜の森にフェントンの恋歌が響く。フォードの計画を挫くため、女たちは彼に修道服を着せる。真夜中の鐘の音を数えながらファルスタッフが登場。アリーチェを見つけて言い寄るが、メグが悪魔の集会だと叫び、2人に逃げられてしまう。

ここからは幻想的なシーン。妖精の女王に扮したナンネッタが「夏の季節風について」と歌う。妖精や小鬼や悪魔たちが集まってきて、怖がってうずくまったファルスタッフを発見。妖精を見た者は死ぬという言い伝えを彼は信じているのだ。仮装した人々は汚れたものとして彼をつつき回す。老騎士は恐怖と痛みに耐えきれず自らの過ちを詫げる。しかしやがて酒臭いバルドルフォを見つけ、これは仮装した人間たちの悪戯であると気づく。嘲笑する人々のなかにフォンターナを見つけたが、それがフォードその人であることを知らされ、彼は自分の完敗を悟る。

勝ち誇ったフォードは、この祭りを妖精の女王の結婚式で終えようと言う。アリーチェがもう一組の男女も、というので二組一緒に祝福の儀式が行なわれる。しかし仮装を解くとカイウスの相手はなんとバルドルフォ! もう一組はナンネッタとフェントンだ。フォードはついに敗北を認め、娘とフェントンの結婚を許す。最後には全員が仲直り。ファルスタッフの音頭で10人のソロと合唱による精緻なフーガ「世の中はすべて冗談」が歌われる。

【原作】ウィリアム・シェイクスピア『ウィンザーの陽気な女房たち』『ヘンリー四世』

【台本】アッリーゴ・ボイト

【作曲年代】1890～1892年 【初演】1893年2月9日、ミラノ・スカラ座

【楽器編成】フルート3（1人はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チンバasso、ティンパニ、打楽器（大太鼓、トライアングル、シンバル）、ハーブ、弦楽5部

【バンド】ギター、バス・ホルン(A b)、鐘

おばた・つねお／昭和音楽大学客員教授、NPO日本ヴェルディ協会理事長。「音楽の友」「レコード芸術」などで音楽評論活動を展開。著書に『ヴェルディ（作曲家・人と作品）』『ヴェルディのプリマドンナたち ヒロインから知るオペラ全26作品』『つながりと流れがよくわかる 西洋音楽の歴史』（共著）、訳書にニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』など。